

ばん ば い せき
番 場 遺 跡

2001年11月

長野県飯田市教育委員会

ばん ば い せき
番 場 遺 跡

2001年11月

長野県飯田市教育委員会

序

飯田市下久堅地区は飯田市南東部、天竜川左岸の竜東地区に位置しています。伊那山地の前山から天竜川に至る段丘は幅が狭く、やや急峻な印象を与える地域で、水田や果樹園等が広がっています。また、古来交通の要衝に位置しており、重要文化財文永寺石室五輪塔等多くの文化財を残している地域です。

このほど下久堅地区のほぼ中央に位置する下虎岩区は、老朽化した地区の集会施設を新築することを計画しました。地域コミュニティー施設の役割を果たすものです。

事業計画地は埋蔵文化財包蔵地番場遺跡内に位置しており、工事に伴い破壊されてしまうおそれがありました。そこで工事实施に先立って緊急発掘調査を実施して記録保存を図ることとなりました。

上述の文化財は、私たちの地域社会や文化を形作ってきた様々な証であり、できる限り現状のまま後世に伝えることが私たちの責務であります。けれども、同時に私たちはよりよい社会や生活を求めていく権利を持っています。それ故に、日常生活の様々な場面で文化財の保護と開発という相容れない事態に直面することが多くなっています。こうした場合、発掘調査を実施して記録にとどめることもやむを得ないものといえましょう。

発掘調査の結果、今から約4,500年前の縄文時代中期、約1,500年前の古墳時代後期に営まれたムラの跡が調査されました。これまで発掘調査があまり行われてこなかった地域にあって、私たちの祖先が残した足どりを紐解く糸口となるものです。調査で得られた様々な知見は、これからの地域の歴史を知っていく上で貴重な資料となります。

調査にあたって地元下虎岩区と隣接地の方々、現地作業および整理作業に従事された調査作業員の皆さんほか関係各位に、多大なご理解とご協力をいただきました。心から感謝し、御礼申し上げる次第です。

平成13年11月

飯田市教育委員会

教育長 富田 泰 啓

例 言

1. 本書はコミュニティー防災センター建設に先立って実施された、長野県飯田市下久堅番場遺跡の緊急発掘調査報告書である。
2. 調査は、飯田市教育委員会が直営実施した。
3. 調査は、平成12年度に現地作業、平成13年度に整理作業及び報告書作成作業を行った。
4. 調査実施にあたり、基準点測量を株式会社ジャステックに委託した。
5. 発掘作業・整理作業にあたり、遺跡略号 S B B に地番2450-3を付し、S B B 2450-3を一貫して用いた。
6. 本報告書では以下の遺構略号を使用している。

掘立柱建物址	－	S T
土坑	－	S K
溝址・溝状址	－	S D
7. 本書の記載順は遺構別を優先し、遺構図は挿図とした。
8. 土層の色調については、『新版標準土色帖』の表示に基づく土色計（第一合成株式会社製、S C R - 1）を用い、マンセル表示で示した。
9. 本書に関わる図面の整理は、調査員・整理作業員の協力により福澤好晃が行なった。
10. 本書の執筆と編集は馬場保之が行なった。
11. 本書の遺構図の中に記した数字は、検出面・床面からそれぞれの穴の深さ（単位cm）を表している。
12. 本書に掲載した石器実測図の表現は『美女遺跡』（飯田市教育委員会 1998 a）に準拠した。
13. 本書に関連した出土遺物及び図面・写真類は飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館・飯田市上郷考古博物館に保管している。

本文目次

例言

目次

第Ⅰ章 経過	1	第3節 遺構および遺物	11
第1節 調査に至るまでの経過	1	(1)掘立柱建物址	11
第2節 調査の経過	1	(2)土坑	13
第3節 調査組織	1	(3)溝址・溝状址	15
第Ⅱ章 遺跡の環境	3	(4)小柱穴	18
第1節 自然環境	3	(5)遺構外出土遺物	18
第2節 歴史環境	4	第Ⅳ章 総括	19
第Ⅲ章 調査結果	9	引用参考文献	19
第1節 調査区の設定	9	報告書抄録	29
第2節 基本層序	11		

挿図目次

挿図1 調査遺跡および周辺遺跡位置図	5	挿図6 遺構分布図	12
挿図2 調査地点周辺地形図	8	挿図7 S T01~04、S K01~03	14
挿図3 調査区位置図	9	挿図8 S K04~07、S D01~04	16
挿図4 基準メッシュ図区画調査位置	10	挿図9 周辺柱穴平面図	17
挿図5 基本層序	11		

表目次

表1 土層観察表	18
----------	----

図版目次

第1図 S T02・S K01・S K02・S K07出土遺物	21
第2図 S K07・S K01・遺構外出土遺物	22

写真図版目次

図版1 調査区全景 S T01	23	図版4 S K03 同遺物出土状況 S K04	26
図版2 S T02 S T03 S T04	24	図版5 S K05 S K06 S K07	26
図版3 S K01 S K02 同遺物出土状況	25	図版6 重機作業風景 発掘作業風景	28

第Ⅰ章 調査の経過

第1節 調査に至るまでの経過

平成12年度に飯田市総務部交通防災課より、飯田市下久堅下虎岩2450番地3におけるコミュニティー防災センター建設の計画が提示された。事業計画地は埋蔵文化財包蔵地番場遺跡にかかるため、飯田市総務部・飯田市教育委員会の二者で保護協議を行い、とりあえず試掘調査を実施しその結果に基づいて改めて協議することとなった。

協議に基づいて試掘調査を平成12年10月18日に実施した。その結果、縄文時代中期から古墳時代にかけての遺構・遺物があり、本調査を実施することが必要であると判断された。そこで急きょ二者協議を行い、本発掘調査を実施することとなった。

第2節 調査の経過

平成12年10月19日、本発掘調査に着手した。まず、重機を入れて表土剥ぎを行い、引き続き作業員を入れ遺構検出・同掘り下げ作業を行った。精査の後、写真撮影・測量調査等を行い、11月7日現地での作業を終了した。その後、飯田市考古資料館において、現地で記録された図面・写真類の基礎的な整理作業を行った。

平成13年度は、引き続き、飯田市考古資料館において出土遺物の水洗・注記・接合作業、遺物の実測・拓本とり、遺構図等の作成・トレース作業、版組み等を行い、本報告書作成作業にあたった。

第3節 調査組織

(1)調査団

調査主体者 飯田市教育委員会 教育長 富田泰啓

調査担当者 福澤好晃・藤原直人・馬場保之

調査員 佐々木嘉和・渋谷恵美子・吉川金利・伊藤尚志・坂井勇雄・羽生俊郎

藤原直人（財団法人長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センターより派遣、平成12年度）

作業員 新井幸子・尾曾ちぶき・北沢一嘉・木下貞子・木下義男・木下力弥・小林定雄

清水恒子・下田芙美子・仲村 信・竹本常子・田中 薫・田中博人・塚原次郎

中村地香子・中山敏子・林 員子・牧内 修・森山昭吉

新井ゆり子・池田幸子・伊東裕子・金井照子・唐沢古千代・木下早苗・木下玲子

小池千津子・小平まなみ・小林千枝・斎藤徳子・佐々木真奈美・佐藤知代子

関島真由美・高木純子・橘 千賀子・筒井千恵子・中沢温子・中田 恵・中平けい子
林勢紀子・林ひとみ・原 昭子・樋本宣子・平栗陽子・福沢育子・牧内喜久子
牧内八代・松下博子・松本恭子・三浦厚子・宮内真理子・森藤美知子・森山律子
吉川悦子・吉川紀美子

(2)指導

長野県教育委員会文化財・生涯学習課

財団法人長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センター

(3)事務局

飯田市教育委員会

久保田裕久 (教育次長)

米山照実 (博物館課長、～平成13年 3月)

中島 修 (生涯学習課長、平成13年 4月～)

小林正春 (博物館課埋蔵文化財係長、～平成13年 3月
／生涯学習課文化財保護係長、平成13年 4月～)

馬場保之 (博物館課埋蔵文化財係、～平成13年 3月
／生涯学習課文化財保護係、平成13年 4月～)

渋谷恵美子 (“ ”)

吉川金利 (“ ”)

伊藤尚志 (“ ”)

下平博行 (“ ”)

坂井勇雄 (“ ”)

羽生俊郎 (生涯学習課文化財保護係、平成13年 4月～)

福澤好晃 (博物館課埋蔵文化財係、～平成13年 3月)

今村 進 (博物館課庶務係長、～平成13年 3月)

松山登代子 (“ 庶務係、～平成13年 3月)

宮田和久 (学校教育課総務係、平成13年 4月～)

第Ⅱ章 遺跡の環境

第1節 自然環境

番場遺跡は飯田市下久堅下虎岩地籍に所在する。

下久堅地区は、飯田市街地の南東約5kmに位置し、天竜川左岸に広がる竜東地域の一角にある。北は境の沢川で下伊那郡喬木村と、南は鮠（いたち）ヶ沢川で龍江地区と境を接している。

飯田市は赤石・伊那山脈と木曾山脈に挟まれた伊那谷の南端にあたり、伊那・木曾両山脈の間を天竜川が南流する。天竜川に沿って典型的な河岸段丘が見られるとともに、山脈の形成に関わる断層地塊運動に伴い盆地・大きな段丘崖が形成されており、複雑な地形を呈している。

伊那谷の基本的な地形は、天竜川の流れたほぼ南北方向の断層段丘地形を特徴としている。伊那山脈は逆断層で持ち上げられており、伊那山脈側が上昇し、天竜川側が沈降している。その一方で、後述するように天竜川の浸食も段丘地形形成に大きく作用していると考えられる。

下久堅地区の段丘は、上段から喬木村の標識的段丘机山・大原・伊久間原・下の原の段丘に続いており、それぞれの段丘は境の沢川・北の沢川・富田沢川・深沢川・宮の沢川・塩沢川・知久沢川・鮠ヶ沢川によって開析されている。各段丘の幅はせいぜい500mと竜西に比較して狭く、また小河川等の浸食により複雑な微地形を呈している。地区内では、下の原段丘面と伊久間面に対比される沖積段丘の間に2枚の面がある。この面上には三石の獣穴がある等、天竜川の浸食の痕跡をとどめており、その後断層運動により隆起したと考えられる（以下、下面から下の原面Ⅰ・Ⅱ・Ⅲとする）。また、地区内南原地籍から南側は天竜川の狭窄部にあたり、鷲竜峡とよばれる。この狭窄部と飯田松川・毛賀沢川の合流のため、地区内では天竜川は蛇行しており、竜東側を大きく浸食している。さらに、左岸側の支流により開析された低地に沖積地が形成されている。

以上の地形概観に沿って、地区内の遺跡を列記すると、沖積地－川原遺跡、伊久間面－京田・番場・南組久保田・主膳の各遺跡、下の原面Ⅰ－竹の下・垣外田・のいわ・南組塚平・南塩沢下・三石・高塚・御代田の各遺跡、下の原面Ⅱ－南塩沢・内御内御堂・馬出し・坂下・小林堀端の各遺跡、下の原面Ⅲ－天神・観音原・北原・亀平北・亀平南・小林宮の上・和平・五輪原・南原中平の各遺跡、伊久間原面－大中尾・中尾・北原上の平・小松原・下の平の各遺跡、大原面－大原・下虎岩藤原・原平それに上久堅内新道地の各遺跡となる。他に、さらに高地の遺跡としてチガ洞遺跡がある（飯田市教委 1998d）。気候の面から見ると、「日本気候区によれば飯田地区は東日本区の一つである中央高原区に入る。この地区の特徴は気温が低く、気温の較差が大きくいわゆる内陸性である。飯田はこの地区のうちにあるが、表日本に近いので内陸的であっても、他地区より冬は暖かく、夏は降水量が多く、多分に表日本的なところをもっている。」（下久堅村誌刊行会 1973）とされる。

第2節 歴史環境（挿図1）

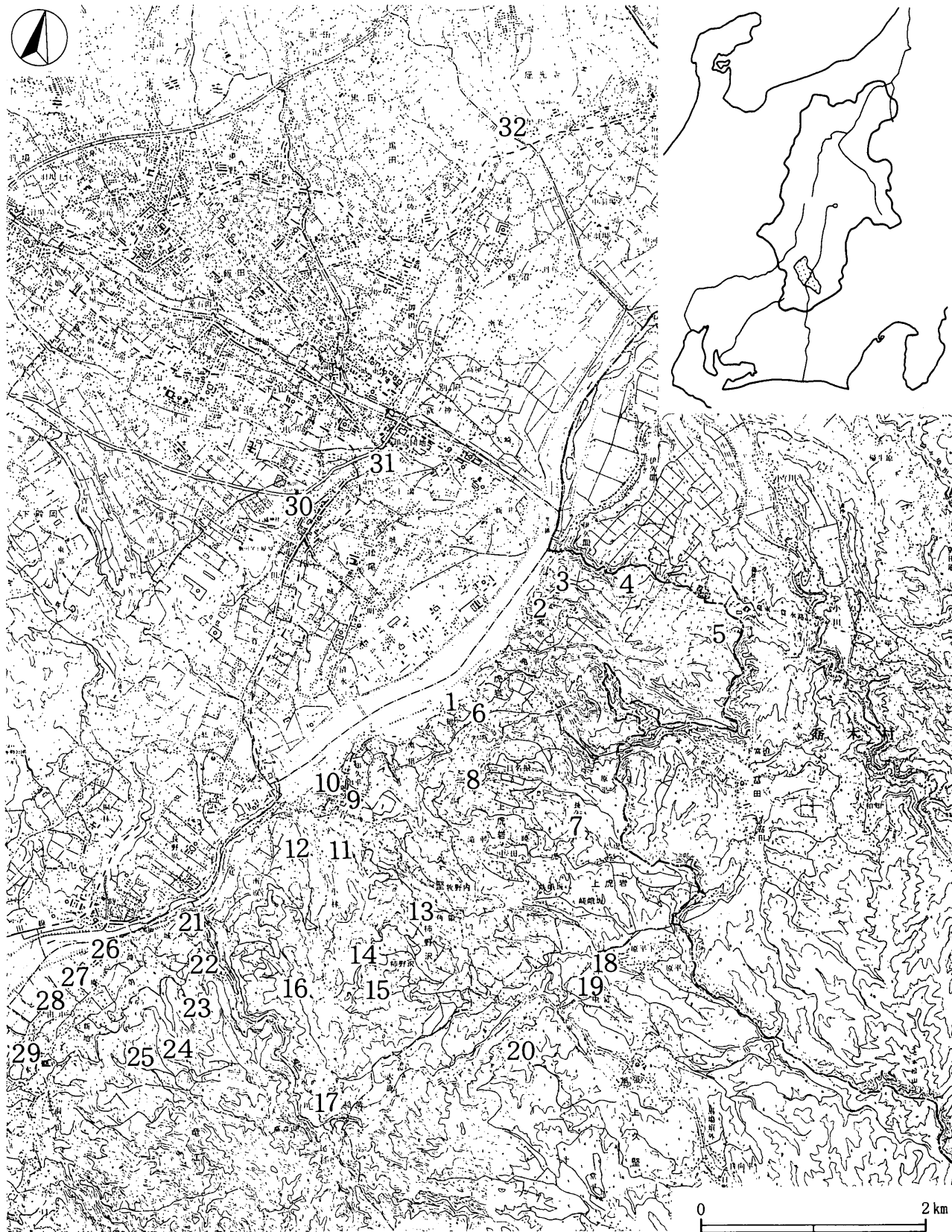
下久堅地区をはじめ、竜東地区ではこれまでほとんど発掘調査が実施されていないため、先史・古代・中世は不明な点が多い。

旧石器時代の遺跡はこれまでのところ確認されていないが、市内では前・中期に位置づけられている石子原遺跡があり、他に断片的に後期旧石器時代の遺物出土が知られている。

縄文時代草創期には下久堅大原遺跡から有舌尖頭器が出土している（飯田市教委 1979）。早期には上久堅北田遺跡で立野式期の竪穴住居址1棟が調査され、立野式土器1個体が復元されている（飯田市教委 1988）。また、大原遺跡では早期かとされる住居址1棟が報告されているが、石器のみで詳細時期は不明である。上久堅塚穴1号古墳北端の周溝下部からは早期末葉の東海系条痕文土器が出土している（飯田市教委 1987）。下久堅中尾遺跡（飯田市教委 1980a）では早期末葉の4棟の竪穴住居址が調査されたといわれ、該期の集落は隣接する喬木村伊久間原遺跡で調査されている。前期には龍江大平遺跡で中葉の黒浜式併行期の竪穴住居址3棟が調査されており（飯田市教委 1995）、さらに龍江田中下遺跡では、前期の焼礫集積遺構や遺物包含層が確認されている。中期には上久堅北田遺跡で大規模な集落が調査され、馬蹄形を呈する典型的な縄文時代の集落景観が把握されている。この他、下久堅天神遺跡・龍江城遺跡・田中下遺跡・龍江阿高遺跡・龍江細新遺跡で、断片的ながら遺構・遺物が調査されている。天神遺跡では中期中葉の住居が7棟あったとされている。龍江城遺跡の溝址1からは上流からの流れ込みであるが、中期後葉から晩期後葉にかけての遺物が出土している（飯田市教委 1997）。龍江田中下遺跡では方形周溝墓の周溝等から中期後葉の遺物出土をみている（1994年調査、未報告）し、龍江阿高遺跡でも中期から後期初頭にかけての遺物が出土している。さらに、細新遺跡では、中期後葉の土器片と、詳細時期不明であるものの焼礫集積遺構が調査されている（飯田市教委 1998b）。後期には天竜川の氾濫原に面した下久堅川原遺跡（佐藤 1971）で後期後半の土器が出土し、詳細な報告はないものの住居址が1棟確認されたといわれている。また、千代大久保遺跡では、後期前半の土器が出土している（下伊那史編纂会 1991）。晩期は中尾遺跡で晩期後半の16号住居址が調査され、炉から深鉢2個体が出土したといわれる。他に時期不明の焼礫集積遺構は大原遺跡でも2基が調査されている。

弥生時代・古墳時代の集落は、天竜川沿いの下段を中心に広く分布しているものと考えられる。具体的な調査例では、川原遺跡で弥生時代中期の竪穴住居址1棟が調査されている。また、細新遺跡で中期中葉北原式期の石囲炉をもつ住居址1棟・後期後半中島式新段階の住居址等2棟が調査されている。北田遺跡でも後期後半～終末期の住居址5棟が調査されており、この時期には標高650mの高所にまで集落分布が拡大したことが判明した。

古墳時代には、細新遺跡で古墳時代中期古段階から後期新段階にかけての、4段階の竪穴住居址69棟が調査され、中期の集落は調査区の北側に、また後期の集落は南側に占地していることが明らかになった。このうち焼失却住居が21棟を占めており、うち1棟は確実な焼却住居であることから、住居を廃棄する際に焼却が多かったのではないかと考えられている。北田遺跡では、17棟の竪穴住居址、24棟の掘立柱建物址等が調査されている。15号住居址は鍛冶工房と考えられ、7世紀代の集落内における小鍛冶の様子が明らかにされた。この集落は、川筋は違うものの、後述の塚穴1・2号古墳との結びつきが指摘されている。この他、内御堂遺跡（飯田市教委 1980b）でも住居址の調査例があるとされる。



- 1. 番場遺跡 2. 北原城跡 3. 天神遺跡 4. 中尾遺跡 5. 大原遺跡・富田窯址 6. 虎岩城跡 7. 花の木城跡
- 8. 神殿古墳 9. 知久平城跡・内御堂遺跡 10. 川原遺跡 11. 小林城跡 12. 文永寺 13. 角領岩跡 14. 塚穴古墳
- 15. 宮の背古墳 16. 野田十三塚 17. 稲葉城跡 18. 北田遺跡 19. 塚穴1・2号古墳 20. 神之峰城跡 21. 兎城跡
- 22. 上ノ城窯址 23. 上ノ城上窯址 24. 御殿田窯址 25. 龍江城山城跡 26. 龍江城遺跡 27. 龍江高遺跡
- 28. 田中下遺跡 29. 龍江石原遺跡 30. 八幡原遺跡 31. 上溝天神塚古墳 32. ナギヅリ1号古墳

挿図1 調査遺跡および周辺遺跡位置図

竜東地区には、下久堅12(14)・龍江10(同)・上久堅3(4)・千代1(同)計26(29)基の古墳が『下伊那史』(括弧内は『飯田の遺跡』記載)に記載されており、竜西の古墳密集地帯からの地理的距離に応じた分布数となっている。この中で、調査された古墳は上久堅地区の塚穴1・2号古墳のみで、7世紀前半の横穴式石室を有する古墳である。うち1号古墳は、出土遺物から一部7世紀中葉のものも混じるが、ほぼ単一時期のもので追葬はされていないと考えられる。下久堅地区の古墳は、集落址に近接した位置に構築されたものの他、標高500mを超え集落址からは離れた場所に立地する神殿・塚穴・宮の背古墳がある。後者は前述の上久堅塚穴1・2号古墳と共通する立地を示し、塚穴1・2号古墳に対する北田遺跡のように、古墳築造に係わる集落が周辺に存在する可能性が示唆される。古墳時代の墳墓群としては田中下遺跡の方形周溝墓群が調査されている。23基の周溝墓が段丘の縁辺から斜面部にかけて構築されており、周溝を共有している。中でも方形周溝墓8は主体部が遺存しており、炭化した板材を組み合わせた棺に遺骸が納められ、副葬品としてガラス小玉等が出土している。こうした立地や形態は市内松尾地区の八幡原遺跡の方形周溝墓群と共通している(飯田市教委 1992a・b)。

奈良・平安時代には、龍江細新遺跡で9世紀初頭3棟、9世紀中葉3棟・9世紀後葉7棟、10世紀後葉～11世紀初頭2棟の住居址等が調査されており、継続した集落の姿と9世紀後葉に盛期があったことが判明している。この他、龍江城遺跡・龍江阿高遺跡で溝址から奈良・平安時代の遺物出土がある。

この他、平安時代には竜西の竜丘地区とともに、龍江御殿田窯跡・上城上窯跡で須恵器生産が行われており、窯業生産が急速に発展したことが窺われる(下伊那歴史考古学研究所 1981)。

中世には、伴野庄の一部として、神氏(みわし)系の豪族知久氏が地区内知久平に居を構え一帯を統治している。戦国時代(文亀年間、1501～1504年)に、知久氏は本拠を上久堅神之峯城に移し、竜東一帯を支配したが、天文23(1554)年武田氏により神之峯城が落城し、織田・豊臣氏の支配を経て、近世には旗本として阿島に居を構え幕末に至っている。知久氏の上久堅移転の初期には、堀切川をはさんだ柏原地区に居を構えたこととされ、北田遺跡の調査で掘り切り跡が確認されたが、これに対応する南側の掘り切りはなく、工事途中で放棄されて神之峯城が整備されたと推測されている。知久氏に関連すると考えられる中世城館跡を示唆する地名や遺構は各所にあり、下久堅地区内に北原城跡・虎岩城跡・花の木城跡・小林城跡・稲葉城跡・角領砦跡、上久堅地区で小野子城跡・茶臼山城跡、龍江地区に兎城跡・龍江城山城跡等がある。また、山地の尾根上には野田十三塚があり、旗塚として「知久氏がこの上に旗を立てて西方の天竜川西の部隊にわが部隊の存在を誇示したもの」とも、民間信仰に関わるものともいわれている(大澤・佐藤 1969、大沢 1971)。更に、上久堅地区には知久氏の建立した寺院(知久18箇寺)のうち、興禅寺・玉川寺が現存する。知久氏は一族から禅宗の名僧を輩出しており、天文2(1533)年京都醍醐理性院の厳助が下向した様子を記した「厳助信州下向日記」は、当時の知久氏の様子がわかる資料である。

居館址等の調査例としては、知久平城跡にかかる内御堂遺跡の調査があり、12～14世紀代の出土遺物等から知久氏の有力武将の屋敷跡ともみられている。また、細新遺跡・北田遺跡では掘立柱建物址が各1棟調査されている。

この他、年代が明らかなものとして、文永寺石室五輪塔がある(重要文化財 文永寺石室・五輪塔保存修理委員会 1987)。石室天井には「弘安癸未一二月二九日神敦幸造ル」の銘が刻まれており、弘安6(1283)年に知久敦幸により造られたことが知られる。一方で、五輪塔下部施設の主体常滑焼大甕は

12世紀前半代の年代観が与えられ、石室と100年以上の年代差がある。また、常滑焼大甕内部からは焼骨および銭貨が出土し、被葬者は五輪塔建立者の一族ないしそれとつながりの強い者と推定され、銭貨から15世紀以降の追葬と考えられる。この他、龍江大平遺跡では土葬墓と考えられる集石土坑が1基調査されている。さらに、塚穴1号古墳石室埋土からは人骨・鉄釘・内耳等が出土しており、中世には居住および埋葬が古墳石室内で行われていたと考えられる。こうした例は市内でも座光寺ナギジリ1号古墳（飯田市教委 1998）・松尾上溝天神塚古墳等でも類例があり、石室内居住・埋葬が常態化していたと考えられる。

近世には考古学的な知見は限られているが、細新遺跡で土葬墓が16基調査され、人骨・棺材の他、煙管・櫛・火打石・柄鏡等が出土している。後期に操業したと考えられる富田窯址では、天目茶碗・湯呑茶碗・鉢・壺・半胴甕・播鉢・植木鉢・焙烙等の日用雑器が生産されていた。また、龍江城遺跡では杭列を伴う石組遺構があり、船着場跡の可能性が指摘されている。

これまで諸開発が竜西地域に比べ著しく少なく、よって考古学的調査が少なく、また過疎化が急速に進行して耕地・山林が荒廃して遺跡等の状況が不分明になりつつある。断片的ながらも竜西地区に劣らぬ歴史を窺うことができ、今次調査結果も新たな知見を加えたことができる。

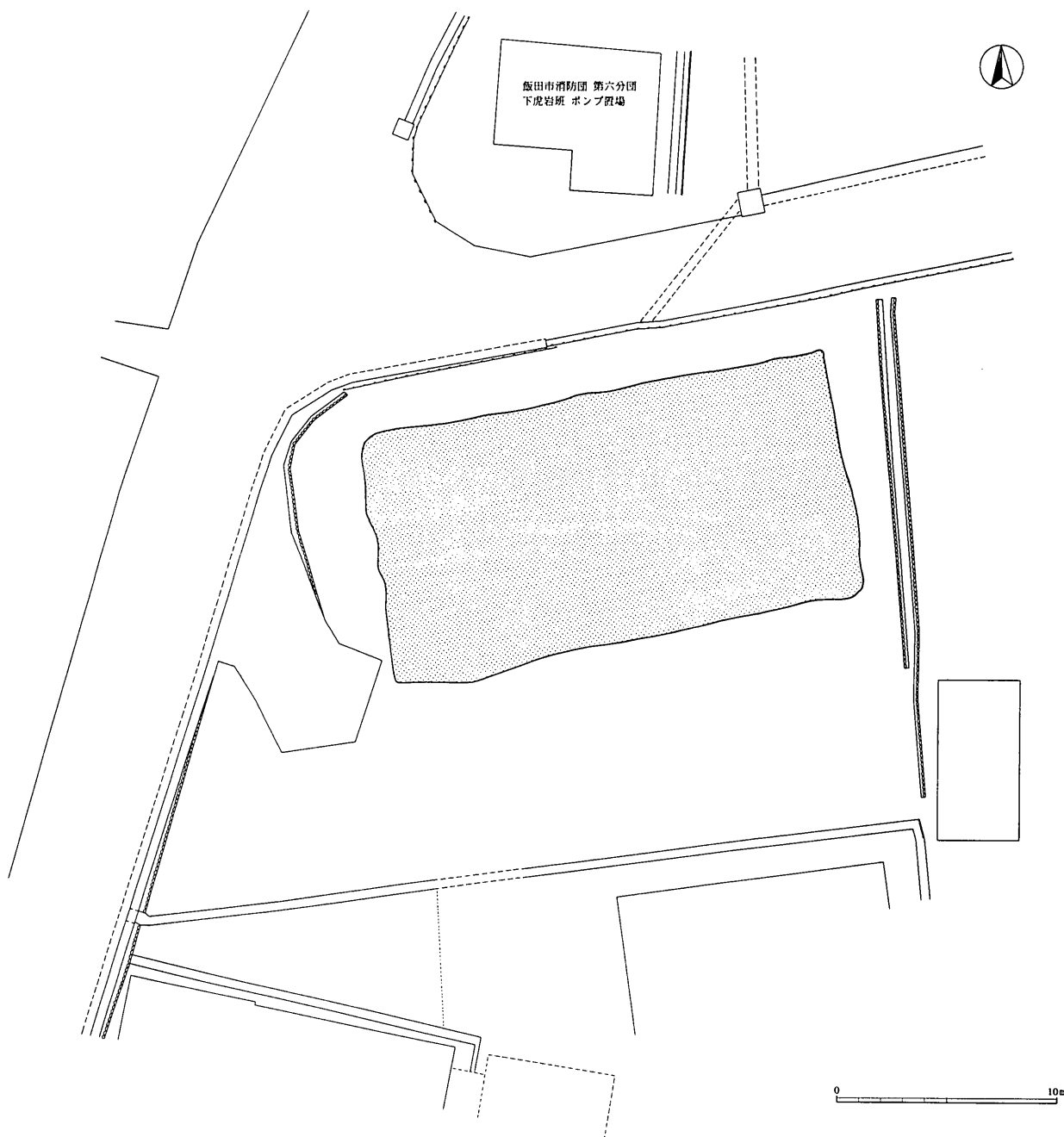


挿図2 調査地点周辺地形図

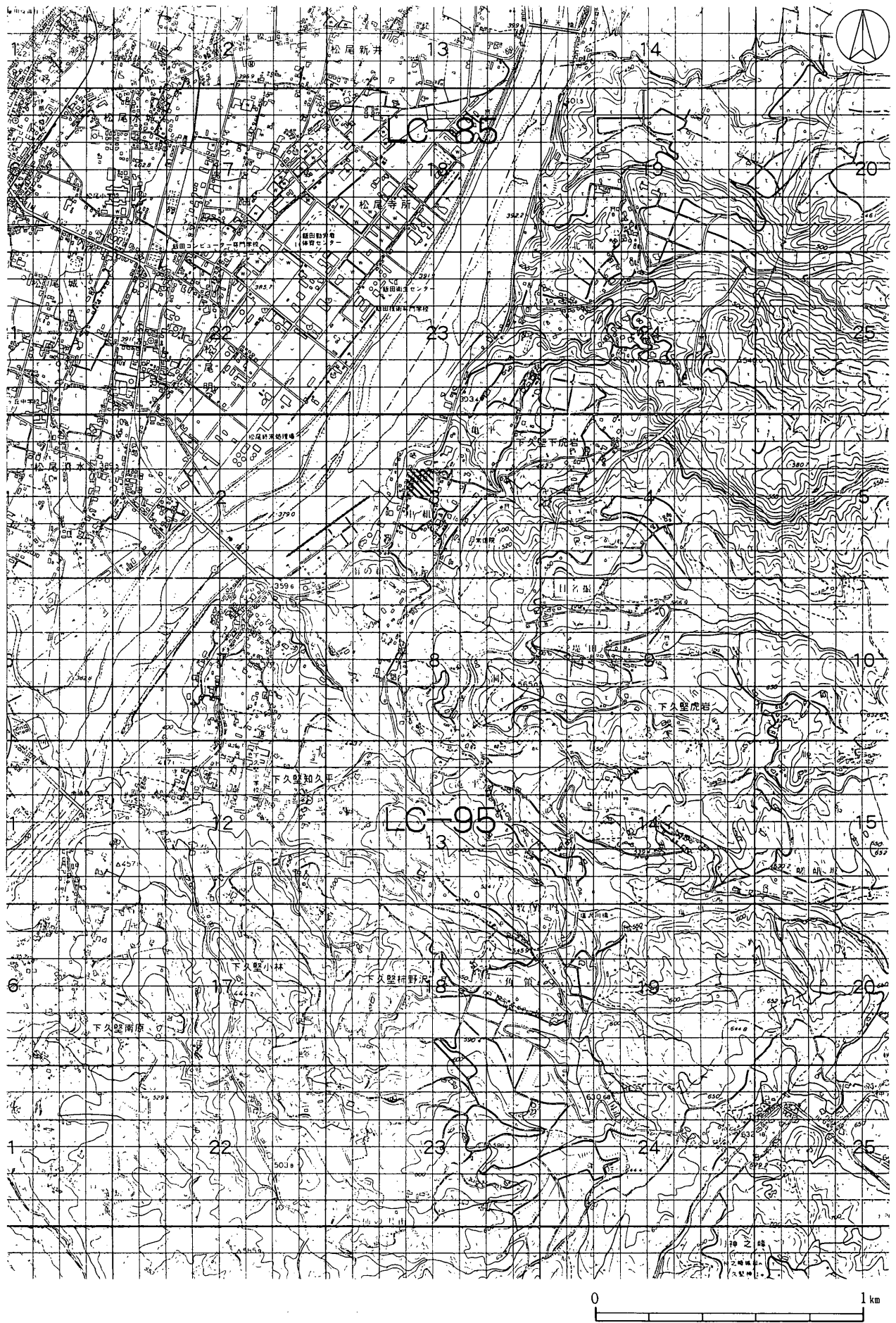
第Ⅲ章 調査結果

第1節 調査区の設定（挿図2～4）

調査区の設定は、飯田市埋蔵文化財基準メッシュ図に基づいて、株式会社ジャステックに委託実施した（設定方法については、飯田市教育委員会 1998 『美女遺跡』他参照）。今次調査地点は、LC-95 3-20内に位置する。



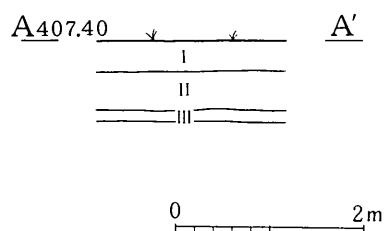
挿図3 調査区位置図



挿図4 基準メッシュ図区画調査位置

第2節 基本層序（挿図5）

模式的に調査区壁で把握した層序を挿図5に掲示する。表土（層厚30cm程の造成土）の下位に、褐灰色土（同40cm）・暗褐色土（同10cm）があり、遺構検出面のローム層に至る。ロームは非常に薄く、下層の礫層が部分的に露呈する。



挿図5 基本層序

第3節 遺構および遺物

調査以前には下虎岩区民会館、さらにそれ以前に虎岩学校校舎が建てられていた（明治12年建設）ため、各所に基礎の攪乱が及んでいた（挿図6）。挿図6中の「基礎の石」は学校校舎基礎に相当する。一方で、基礎以外の部分では遺構の遺存状況は比較的良好であった。なお出土遺物（土師器・須恵器）の分類については、『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4－松本市内その1－』（長野県埋蔵文化財センター 1990）に拠った。

(1) 掘立柱建物址

① S T 01（挿図7）

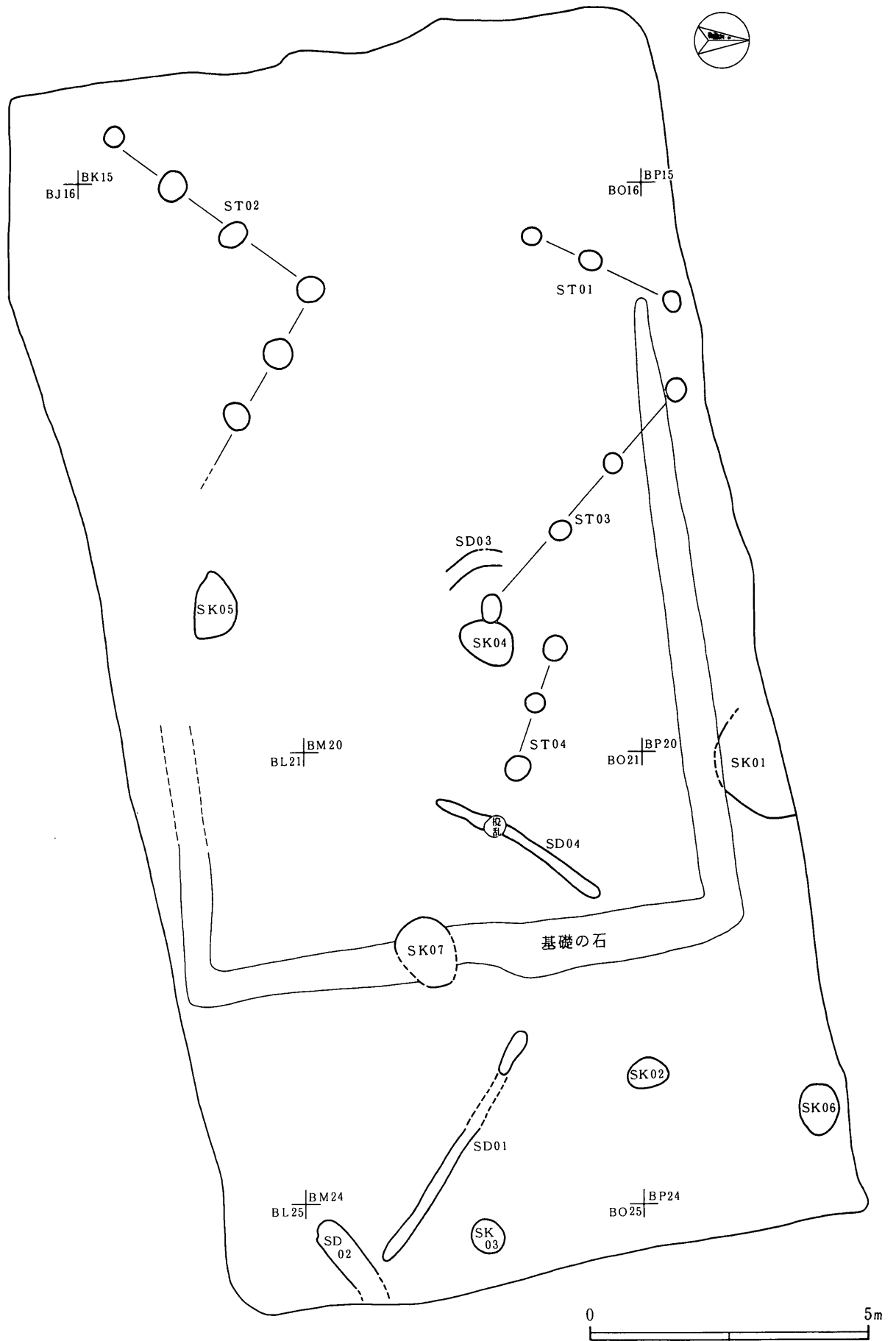
B O 16付近で検出された。一辺3基の柱穴のみで柵列の可能性もあるが、柱穴の径等から掘立柱建物址と判断した。方向は、N25.5° Eを示す。柱痕は確認できず、柱間はP 1・P 2が1.25m、P 2・P 3が0.75mを測る。P 2は柱痕とおぼしき辺りに炭があり、炭化材であった可能性がある。掘り方は不整形円形を呈し、径は約40cm、深さ20cm程度である。

P 2から土師器甕かと思われる小片、P 3からも土師器小破片が出土している。

② S T 02（挿図7、第1図1・2）

B K 16付近で、北西辺および北東辺の側柱を検出した。他の部分は攪乱等のため検出できず、主軸方向等は把握できなかった。3間×2間以上の側柱の建物址と考えられるが、調査区外に延びる可能性もある。北西辺はN36° E方向を示す。北西辺のP 6南西側壁際にかかる柱穴は、土層や深さを異にするため本址には伴わないと判断した。P 1～P 5では柱痕が平面および断面で確認された（スクリーン部分）。これによると平面形は円形ないし楕円形で10～20cm程の太さで、掘り方よりやや浮いた状態で据えられている。柱間は北東辺が心々で1.32m、北西辺はP 3・P 4間が心々で1.68m、P 4・P 5間が1.44mを測る。掘り方は不整形円ないし楕円形を呈し、P 6は径35cm程と他の柱穴より規模が小さいが、他は径50～55cm、深さ20～30cm程度である。

出土遺物は、P 3から土師器甕・坏、P 5から非クロ系の坏D（第1図1）・袖珍土器（2）が出土した。出土遺物から6世紀代の建物址と考えられる。



挿図6 遺構分布図

③ST03 (挿図7)

B O18付近でSK04を切って検出された。一辺4基の柱穴のみであるが、ST01・ST04と同様、柱穴の径等から掘立柱建物址と判断した。N48.5° W方向をとる。柱痕は確認できず、柱間はP1・P2が1.36m、P2・P3が1.16m、P3・P4が1.48mを測る。掘り方は円形ないし楕円形を呈し、規模は径35～50cm、深さ20cm程度である。

P3から土師器甕と思われる小破片が出土しているのみで、時期等詳細は不明である。

④ST04 (挿図7)

B O20付近で検出された。一辺3基の柱穴を検出したのみであるが、他のSTと同様、掘立柱建物址と判断した。N71° W方向をとる。柱痕は確認できず、柱間はP1・P2が0.65m、P2・P3が0.75mを測る。掘り方は円形ないし不整楕円形を呈し、規模は径35～50cm、深さ10cm程度である。

P3から土師器甕片が出土した。時期等詳細は不明である。

(2)土坑

①SK01 (挿図7、第2図17～20)

B P21付近で検出された。一部調査区外にかかる。柱穴に切られ、建物基礎攪乱により破壊されるため、規模等は不明である。深さ約20cmを測る。壁はだらだらとした立ち上がりを示す。

出土遺物は土師器甕・坏があり、その他、瀬戸・美濃系の鉄釉灯明受皿が混入出土している。

詳細時期は不明である。埋土がSK04の2層に類似し、硬砂岩製の剥片石器(第2図17～19)が出土していることから、縄文時代中期の可能性が高い。他に土師器の出土がある。

②SK02 (挿図7、第1図3～12)

B O23・B P23で検出された。規模70×53cm、深さ40cm、長軸方向N22.5° Wを測る。壁は急な立ち上がりであるが、上半2/3はやや開く。底面より浮いた状態で5～20cm大の礫がまとまっており、大きめの礫が下部に集中している。

出土遺物は一部縄文時代後期と思われる破片があるが、中期後葉の深鉢が大半で、中期後葉に比定される。

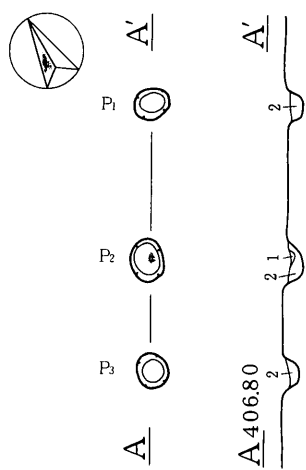
③SK03 (挿図7、第1図13～25)

B N25で検出された。規模65×56cm、深さ35cm、長軸方向N58° Eを測る。壁は急な立ち上がりを示す。底面より15cm程度浮いた状態で10～15cm大の礫があり、その上部に土器がまとまって乗っている。

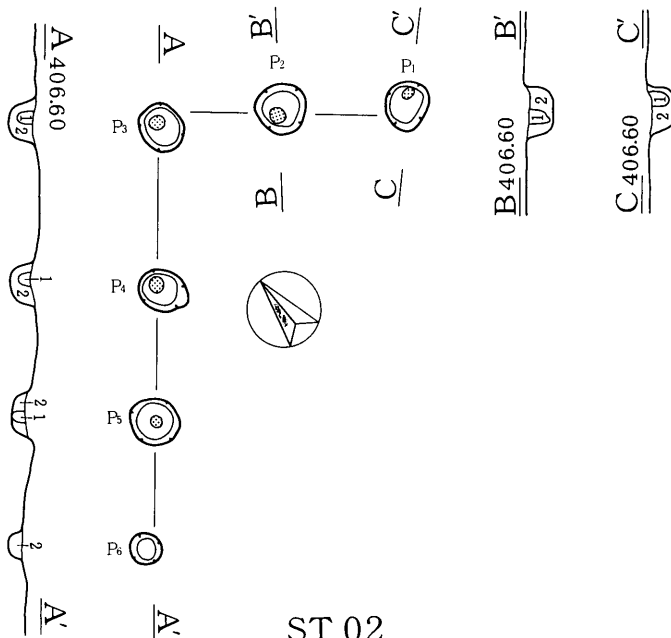
出土遺物は縄文時代中期後葉の深鉢があり、同期の遺構である。

④SK04 (挿図8)

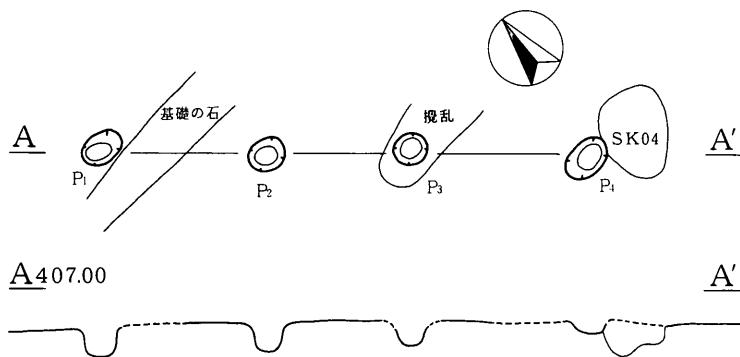
B N19・20で検出された。ST03に切られる。規模100×73cm、深さ33cm、長軸方向N23.5° Eを測る。南側は一段高く、壁は急な立ち上がりを示す。上段の底面レベル付近で、10～35cm大の礫が集中している。



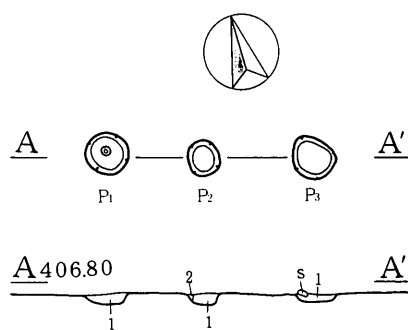
ST 01



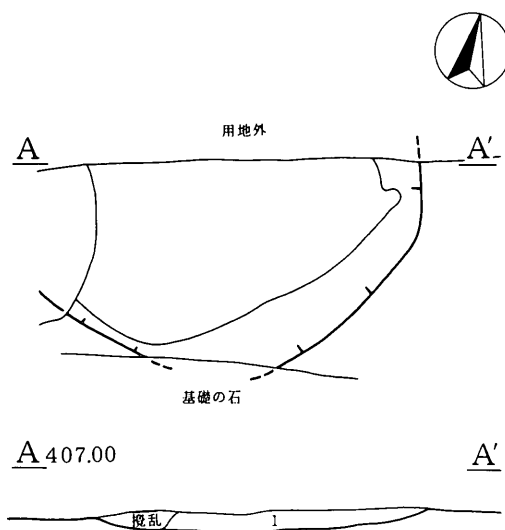
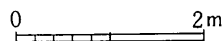
ST 02



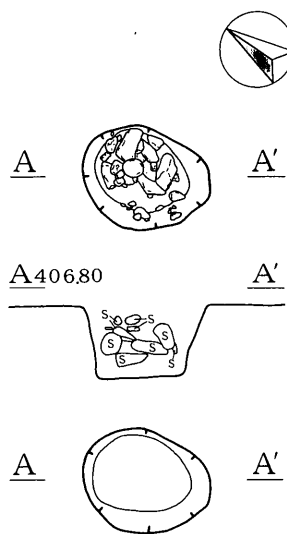
ST 03



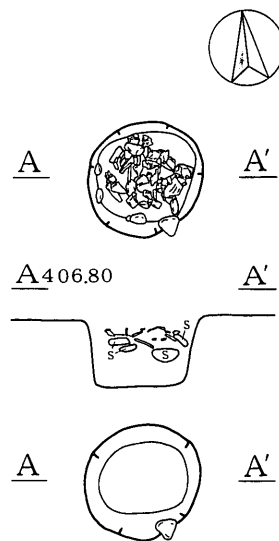
ST 04



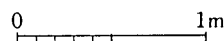
SK 01



SK 02



SK 03



挿図7 ST01~04、SK01~03

⑤ S K05 (挿図 8)

B L19で検出された。規模(120×75) cm、深さ20cm、長軸方向N88.5° Wを測る。壁は緩やかな立ち上がりであるが、南側は建物基礎にかかり上半を欠いている。埋土の上層に焼土が混じる。

出土遺物はなく、時期・性格等詳細は不明である。

⑥ S K06 (挿図 8)

B Q24付近で検出された。攪乱に上部を壊される。規模(86×63) cm、深さ40cm、長軸方向N84.5° Wを測る。壁は緩やかな立ち上がりである。5～20cm大の礫が集中して出土している。

出土遺物は縄文時代中期後葉の深鉢があり、同期に比定される。

⑦ S K07 (挿図 8、第1図26～第2図3)

B N22付近で検出された。一部建物基礎により壊される。規模124×103cm、深さ38cm、長軸方向N 0° Wを測る。壁はやや緩やかな立ち上がりである。断面Bにかかる北壁側の礫は、長さ50cm程の扁平な礫で、中期後葉の「掘炬燵」と呼ばれる炉址に似通っているが、掘り方上部まで礫が顔を出しておらず、炉址とは考えがたい。内部からは焼土・炭等は確認されなかった。

出土遺物は縄文時代中期後葉の深鉢で、この時期に比定される。

(3) 溝址・溝状址

① S D01 (挿図 8)

B N24付近で検出された。規模480×30cm、深さ15cm、長軸方向N58.5° Wを測る。弥生時代の囲溝址、住居址の周溝ないし雨落ち溝の可能性も考えられる。

出土遺物はなく、時期等詳細は不明である。

② S D02 (挿図 8)

B M25で検出され、調査区外に延びる。規模60×—cm、深さ20cm、長軸方向N59° Eを測る。北側の壁はやや緩やかな立ち上りを示す。

出土遺物は縄文土器および土師器坏と思われる小破片で、時期等詳細は不明である。

③ S D03 (挿図 8)

B N19で検出された。規模30×—cm、深さ6cmを測る。やや蛇行するが、ごく部分的に確認したのみで、全体の形状は不明である。

出土遺物は、時期不明の縄文土器片があるが、詳細は不明である。

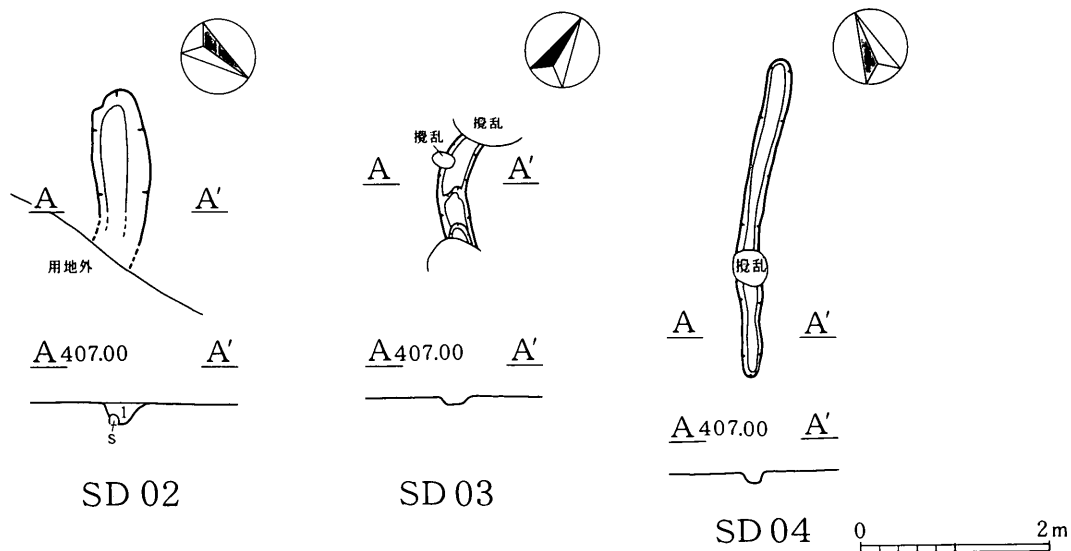
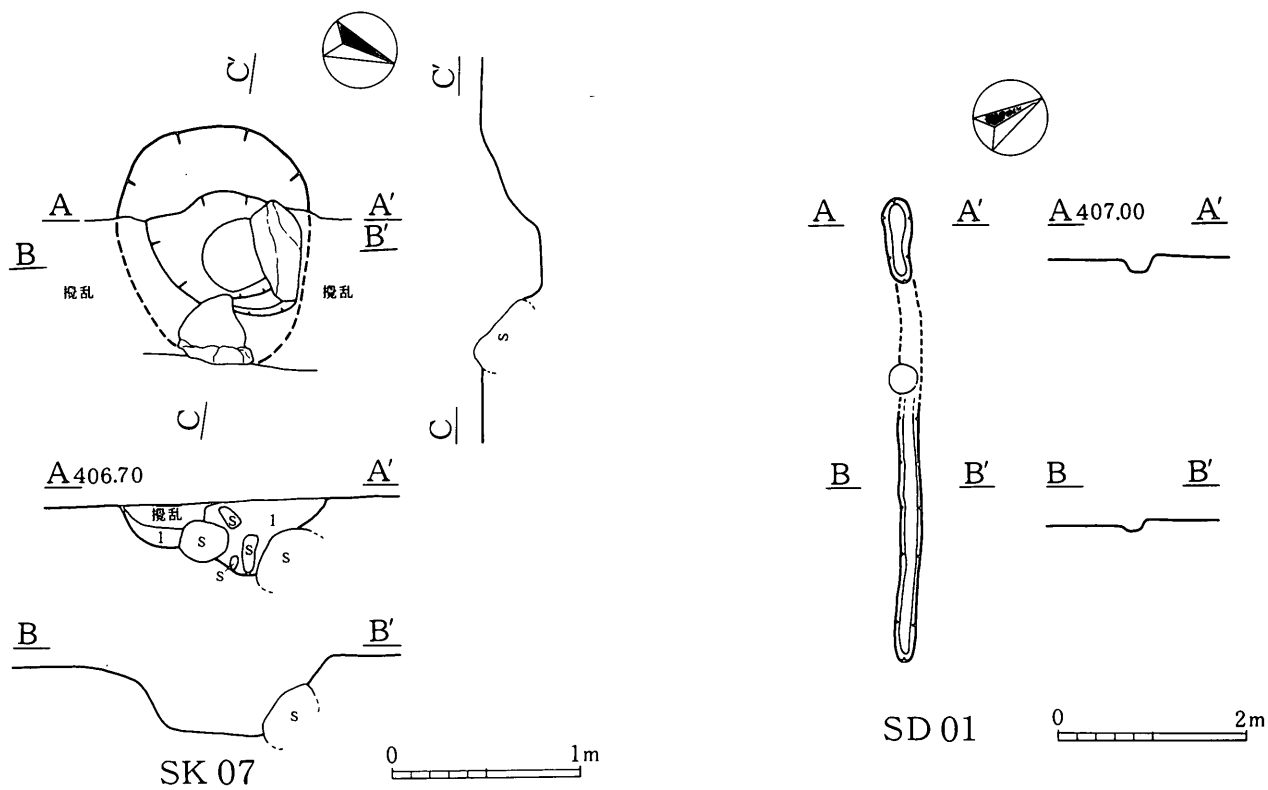
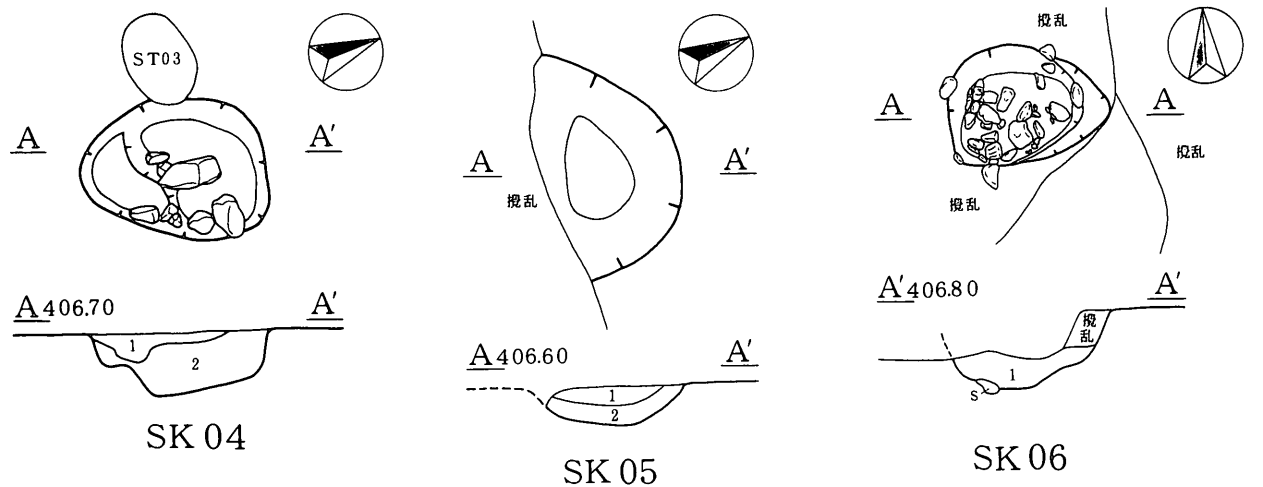
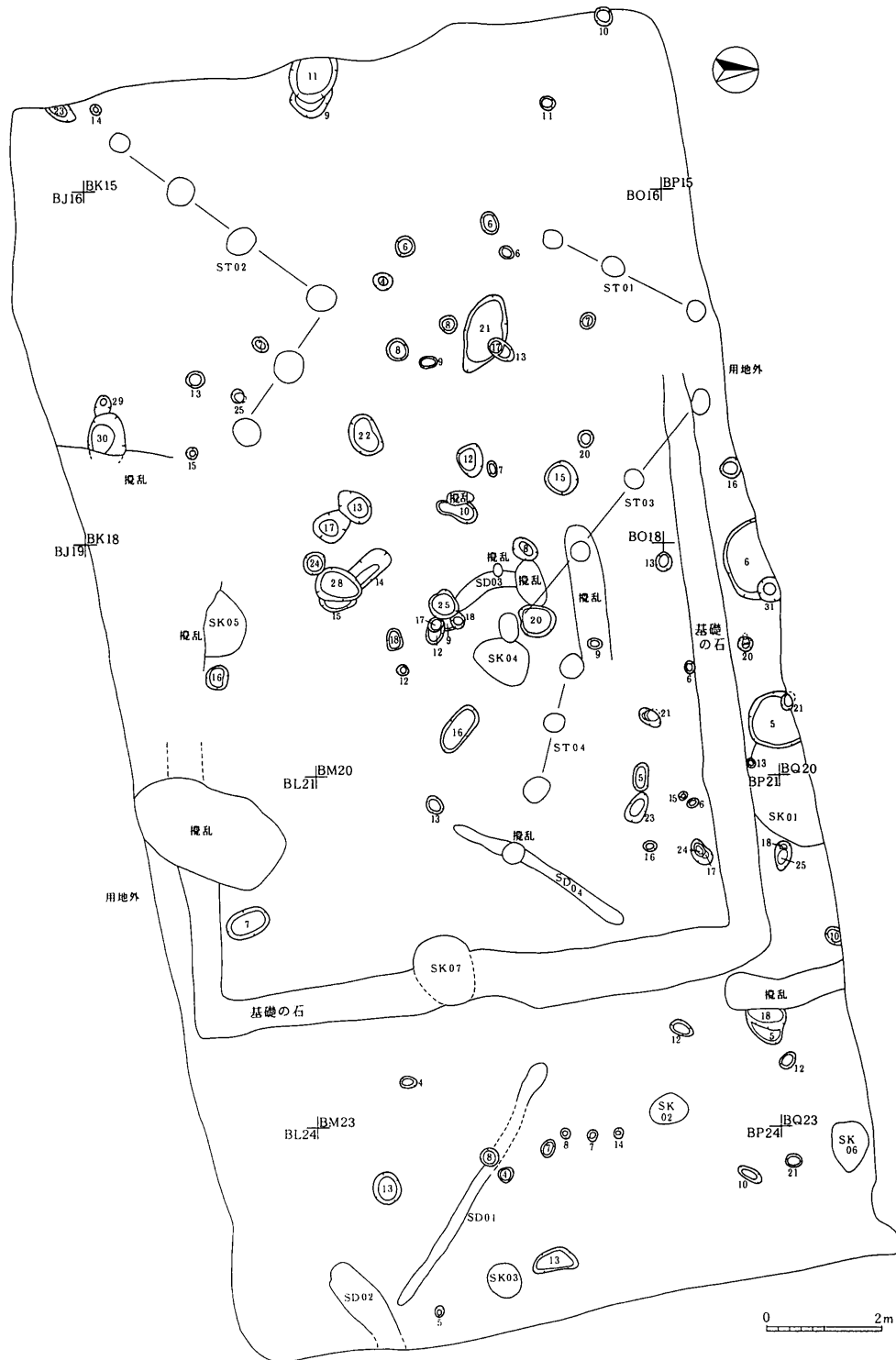


插图 8 SK04~07、SD01~04

④SD04 (挿図8)

BN24付近で検出された。規模335×25cm、深さ12cm、やや湾曲するものの、長軸方向N30°Eを測る。

出土遺物はなく、時期等詳細は不明である。



挿図9 周辺柱穴平面図

(4)小柱穴 (挿図 9・10)

調査区のほぼ全体から小柱穴が検出された。規則的な配列は把握されなかったが、規模等から中・近世の建物址の柱穴と考えられる。

(5)遺構外出土遺物

①縄文時代

S K01～03・06・07付近を中心に縄文時代中期後葉の遺物 (第2図 4～14・17～23) が出土している。他に後期後葉の浅鉢 (15) がある。22・23は黒曜石製で、23は微細剥離痕のある剥片である。

②弥生時代

第2図16は弥生時代後期の波状文施文の甕頸部破片である。

③古墳時代

土師器甕・非ロクロ系坏D、須恵器坏蓋B・壺?の破片が出土している。

④近世

S K01から混入出土の瀬戸・美濃系の鉄釉灯明受皿が混入出土した。18世紀後半以降に比定される。

遺構名	層	JIS標準色票	土壌色	土性	しまり	粘性	備考
基本層序	I	表土(造成土)					
	II	10YR4/1	褐灰	SiC	良	なし	
	III	10YR3/4	暗褐	SiC	良	なし	
ST01	1	10YR3/2	黒褐	SiC	良	あり	
	2	10YR2/1	黒	HC	良	あり	
ST02	1	10YR2/2	黒褐	HC	やや良	あり	
	2	5YR3/1	黒褐	SiC	良	あり	径10～50mmの礫を含む。
ST03P1	1	10YR2/1	黒	—	—	—	
P2	1	10YR2/1	黒	—	—	—	
P3		—	黒褐	—	—	—	
P4		—	黒褐	—	—	—	
ST04	1	10YR3/3	暗褐	SiC	良	ややあり	
	2	7.5YR4/4	褐	HC	良	あり	
SK01		10YR3/2	黒褐	SiC	良	あり	
SK02		10YR3/2	黒褐	—	良	あり	焼土含む。埋土上層から遺物出土。
SK03		7.5YR3/2	黒褐	HC	良	あり	焼土微量に含む。炭少量含む。埋土下層から土器多量に出土。
SK04	1	10YR3/2	黒褐	—	良	ややあり	
	2	10YR4/4	褐	—	良	あり	
SK05	1	10YR2/3	黒褐	SiC	良	あり	炭、焼土混。
	2	10YR4/4	褐	SiC	良	あり	
SK06		10YR3/4	暗褐	SiC	良	あり	
SK07		10YR3/4	暗褐	SiC	良	あり	炭混。
SD01		10YR3/3	暗褐	SiC	良	あり	
SD02		10YR3/3	暗褐	SiC	良	あり	
SD03		7.5YR2/3	極暗褐	LiC	良	ややあり	
SD04		—	暗褐	—	—	—	

表1 土層 観察表

第Ⅳ章 総括

これまでみてきたように、調査以前に建設された建物による破壊等かなり影響があったが、なお、遺構・遺物が相当数調査されており、一定の成果が挙げられた。時代毎に概観して総括としたい。

1. 縄文時代

該期の遺構として土坑が6基調査されており、中期後葉を中心に後期後葉までの遺物出土がある。土坑はいずれも礫を伴うものである。試掘調査時には、S K02・03付近で土坑と同じ土層が一定の広がりがあり、住居址があった可能性が指摘できる。

2. 弥生時代

遺物出土があるので、該期に調査地点周辺に集落があったことは疑いないが、断片的で詳細は不明である。該期には高位段丘上には住居が散在する集落が多く、本遺跡もこうした集落景観を呈していたと考えられる。

3. 古墳時代

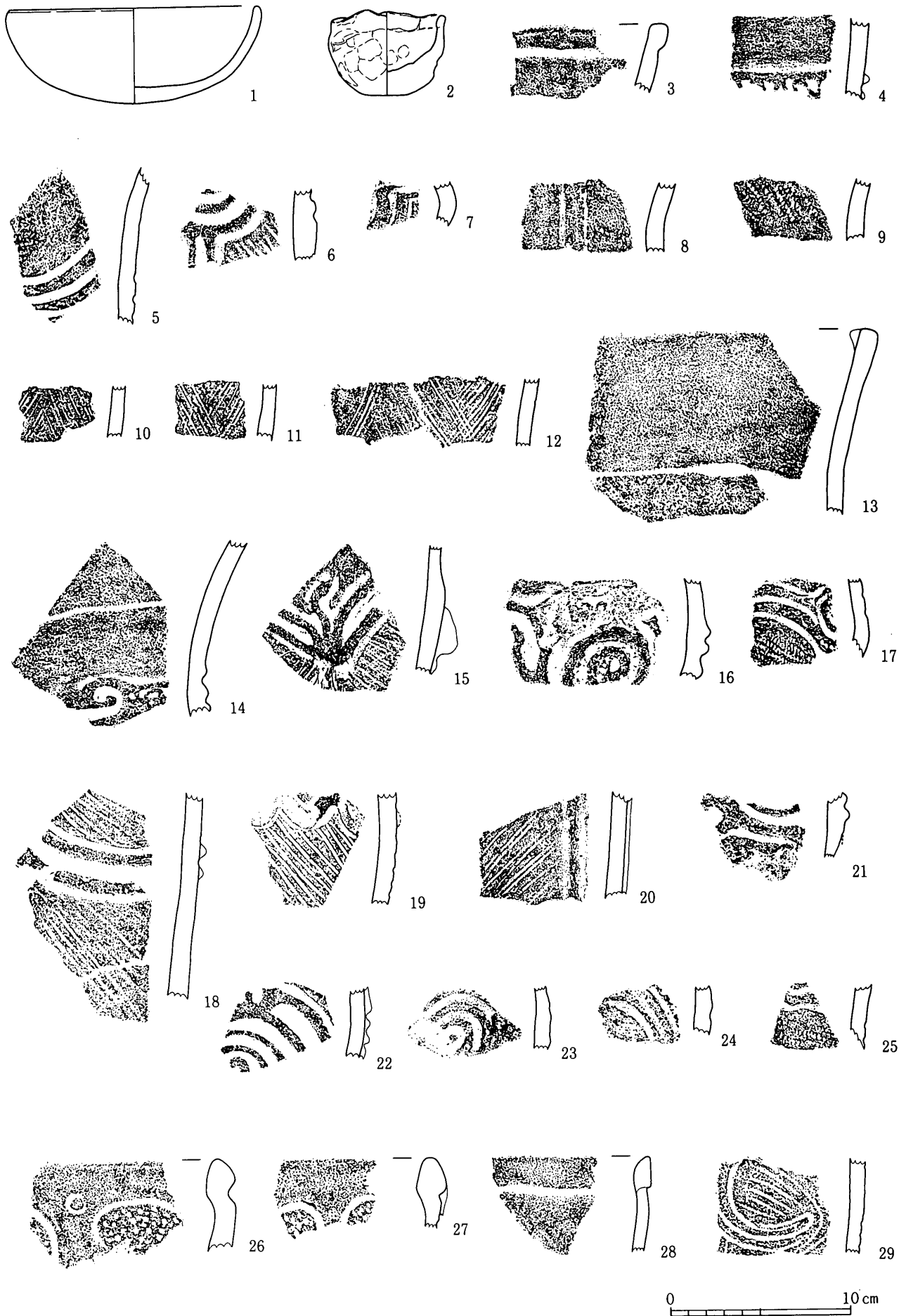
やはり断片的であるが、掘立柱建物址と考えられる遺構が調査されている。上久堅北田遺跡や伊賀良中村中平遺跡（飯田市教委 1994）では住居群と倉庫群が近接はしているものの、分布域を異にしている。とすれば、今次調査地点は倉庫域の一画と考えることが可能であり、周辺に住居群が展開していた可能性が高い。

限られた調査ではあったが、各時代の集落の一画が確認されたのは事実であり、今次調査地点周辺にさらに集落が広がっていることは疑いない。今後周辺での文化財保護の本旨に則った不断の努力を積み重ねることにより、本遺跡の実態解明が進み、今次調査の成果が活かされるといえる。

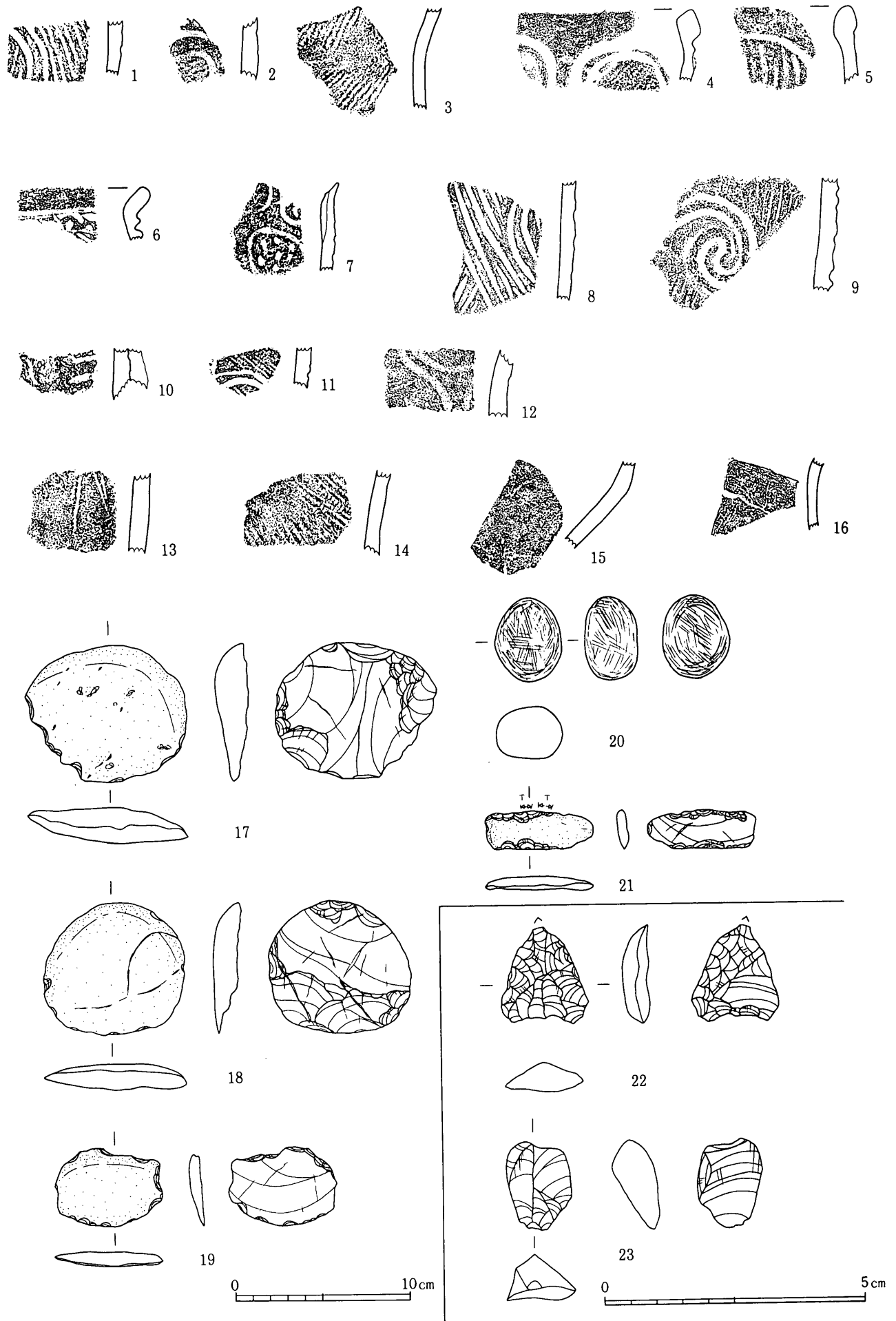
引用参考文献

飯田市教育委員会	1979	『大原遺跡・富田窯址』
飯田市教育委員会	1980 a	『中尾・天神遺跡』
飯田市教育委員会	1980 b	『内御堂遺跡』
飯田市教育委員会	1983	『知久平遺跡群』
飯田市教育委員会	1987	『塚穴1号・2号古墳』
飯田市教育委員会	1988	『北田遺跡』
飯田市教育委員会	1992 a	『八幡原遺跡』

- | | | |
|------------------------|--------|---------------------------------------|
| 飯田市教育委員会 | 1992 b | 『八幡原遺跡』 |
| 飯田市教育委員会 | 1994 | 『中村中平遺跡』 |
| 飯田市教育委員会 | 1995 | 『龍江大平遺跡』 |
| 飯田市教育委員会 | 1997 | 『龍江城・龍江阿高遺跡』 |
| 飯田市教育委員会 | 1998 a | 『美女遺跡』 |
| 飯田市教育委員会 | 1998 b | 『細新遺跡Ⅱ』 |
| 飯田市教育委員会 | 1998 c | 『ナギジリ 1号古墳』 |
| 飯田市教育委員会 | 1998 d | 『飯田の遺跡』 |
| 大澤和夫・佐藤甦信 | 1969 | 「飯田市野田十三塚の発掘」『考古学ジャーナル』35 |
| 大沢和夫 | 1971 | 「野田十三塚遺跡」『長野県考古学会誌』10 |
| 佐藤甦信 | 1971 | 「川原遺跡」『長野県考古学会誌』10 |
| 下伊那史編纂会 | 1955 | 『下伊那史 第二巻』 |
| 下伊那史編纂会 | 1955 | 『下伊那史 第三巻』 |
| 下伊那史編纂会 | 1991 | 『下伊那史 第一巻』 |
| 下伊那歴史考古学研究所 | 1981 | 『信濃御殿田』 |
| 下久堅村誌刊行会 | 1973 | 『下久堅村誌』 |
| 重要文化財 文永寺石室・五輪塔保存修理委員会 | 1987 | 『重要文化財 文永寺石室・五輪塔修理工
事報告書』 |
| (財)長野県埋蔵文化財センター | 1990 | 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4－松本
市内その1－』 |



第1图 ST02·SK01·SK02·SK07 出土遺物



第2図 SK07・SK01・遺構外出土遺物



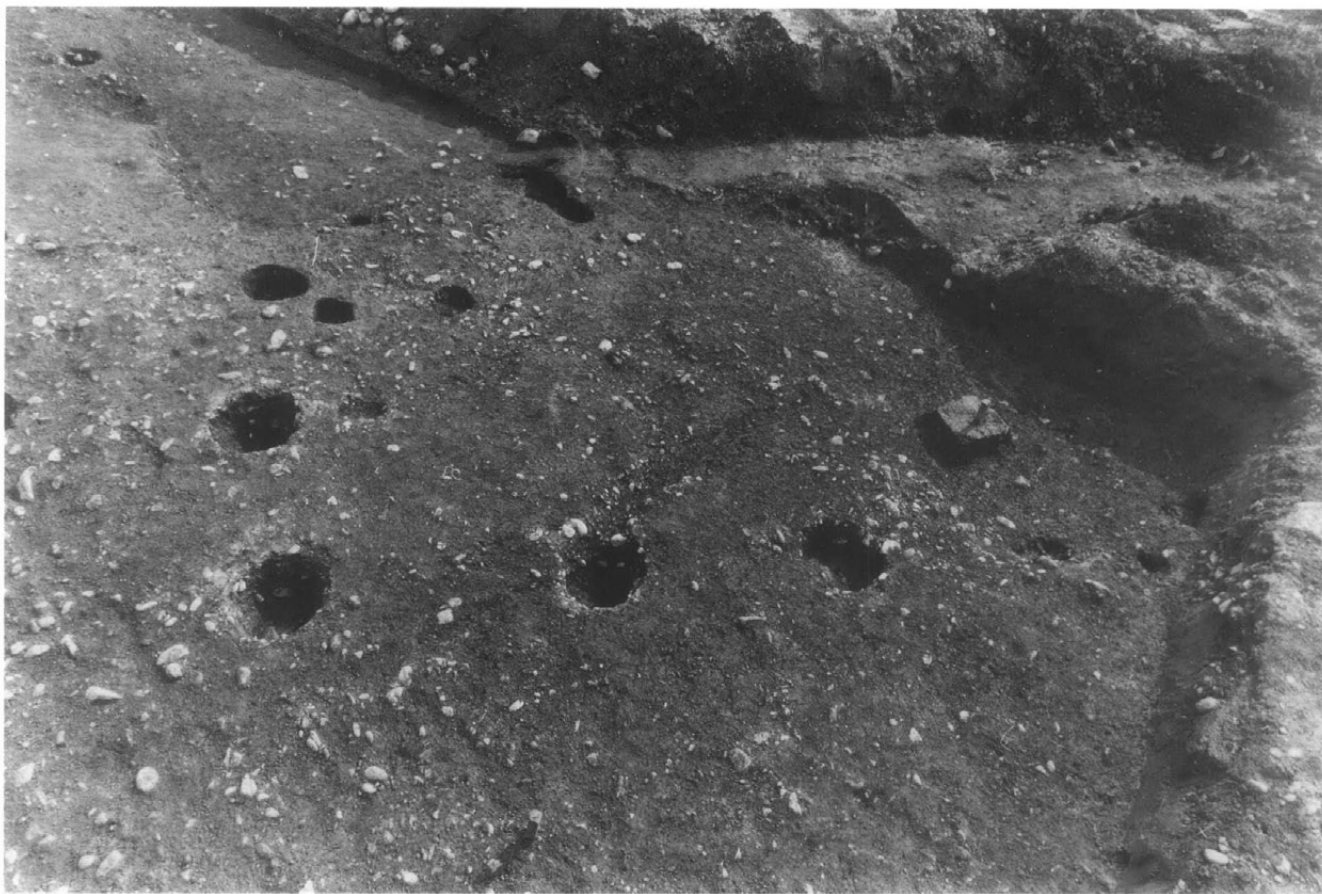
調査区全景



同上



ST01



ST02



ST03



ST04



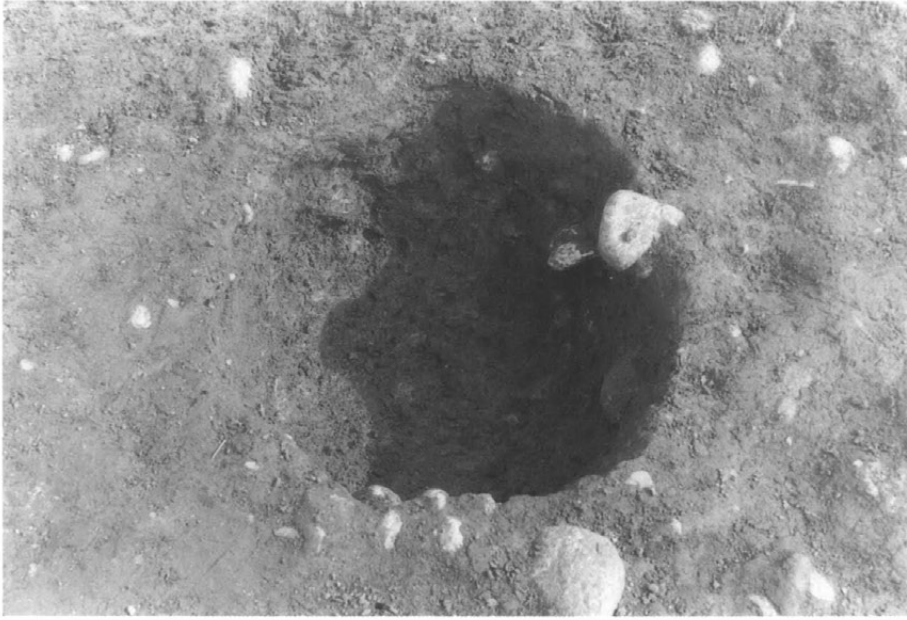
SK01



SK02



同 遺物出土状況



SK03

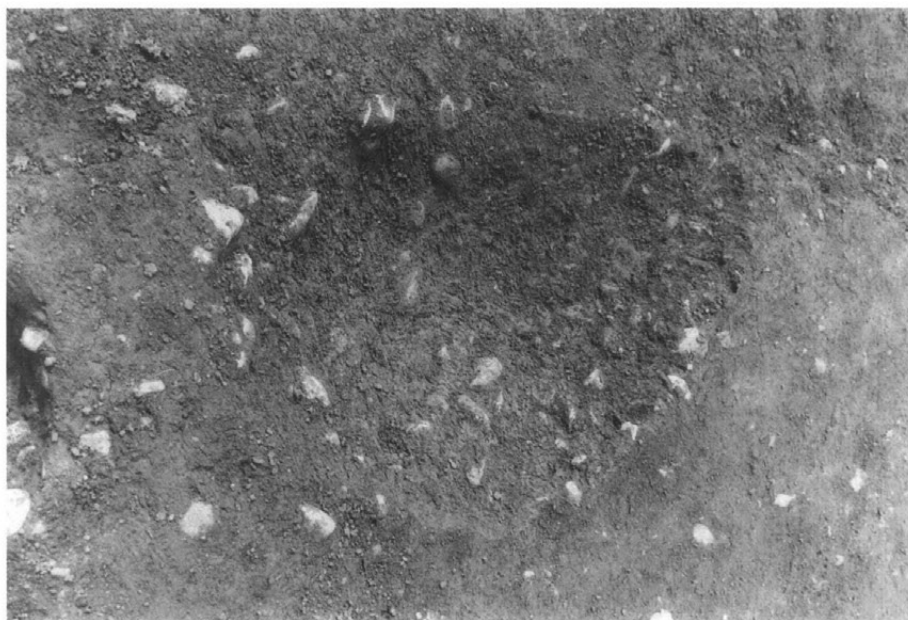


同 遺物出土状況



SK04

SK05



SK06



SK07





重機作業風景



発掘作業風景



同上

報告書抄録

ふりがな	ばんばいせき							
書名	番場遺跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	馬場保之							
編集機関	長野県飯田市教育委員会							
所在地	〒395-0002 長野県飯田市上郷飯沼3145番地 TEL.0265-53-4545							
発行年月日	平成13年11月30日							
ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ばんばいせき 番場遺跡	飯田市 下久堅 2450-3	2053	442	35° 28′ 57″	137° 51′ 35″	平成12年 10月18日～ 11月9日	257㎡	コミュニテ ィー防災セ ンターの建 設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物	特記事項	
ばんばいせき 番場遺跡	集落址	縄文時代 中期 弥生時代 後期 古墳時代 後期	掘立柱建物址	4棟		縄文土器 石器 弥生土器 土師器 須恵器 陶器	縄文時代から 古墳時代にか けての集落址 の一面が調査 された。	

番場遺跡

2001年11月 発行

編集・発行 長野県飯田市上郷飯沼3145番地

長野県飯田市教育委員会

印刷 飯田共同印刷株式会社

